

◆青森大学・櫛引教授ご寄稿文（縄文ファンとして）



青森大学 櫛引 素夫 教授

1962年青森市生まれ。青森大学社会学部にて教鞭をとる傍ら、北海道新幹線の社会的・経済的諸課題の研究およびご提言をされております。

専門地域調査士（日本地理学会）。JAF（日本自動車連盟）青森支部交通安全実行委員会委員長。

「道南も岩手県北も秋田県北も、大昔はオラホと同じ一つの『ケン』だったんだよ」。20年近く前、八戸市の考古学者から、そんな言葉を聞きました。縄文時代晩期の美しい土器の文様を眺めながら、彼はそうつぶやきました。なるほど、県境も藩境も、せいぜいこの400年ほどの間に書類の上で引かれた境界です。そんな境が存在する以前も、その後も、地続きの大地を風は吹き渡り、潮は海岸を洗って、人の暮らしがその上に積み重なってきました。頭から「たが」が外れたような気がしました。「ケン」は「県」なのか「圏」なのか。

ともあれ、1万年以上にわたる縄文時代、その大半の時期を、道南と北東北は「同じケン」として過ごしてきました。津軽海峡の潮風に吹かれて目を閉じると、かつて、ここを往来したであろう人々の姿が浮かんでは消えます。どんな舟に乗っていたのでしょうか。どれぐらいの手間をかけて、どんな木からその舟を作ったのでしょうか。積み荷は何だったのでしょうか。何を食べ、どのような歌を口ずさみながら、どれほど時間をかけて対岸へたどり着いたのでしょうか。潮騒に耳を傾けるうち、あれこれの思いが寄せては返します。

縄文の人々も、彼らなりに工夫を凝らして日付を刻んでいたらしいことは、数々の遺構が示しています。しかし、今日でいう時計もカレンダーも存在しません。土器や石器などの遺物にも、柱穴や住居跡、水場跡といった遺構にも、「〇年〇月〇日製作」とは記されていません。それでも、考古学者たちは遺物・遺構の特徴と出土状況、埋まっていた土壌や地形を丹念に調べて、彼らの暮らしや、その移り変わりの再現に努めてきました。中でも、大きな決め手となり、専門家以外にも分かりやすいのは、土器の形と文様、色彩などの特徴です。口縁部の突起の有無。突起は三つか四つか五つか、それとも六つか。土器の大きさと厚み。寸胴型か丸みを帯びているか。そして文様のデザインは…。最初は皆、同じ土器に見えても、これらに着目すれば、だんだん、土器が作られた時期と地域、さらには土器そのものの完成度まで見分けがつくようになります。ほぼ同じ形式の土器でも、川の流域によって微妙に文様や仕上がりが異なることなども分かってきます。

少し目のトレーニングを重ねた後で、道南や北東北の遺跡を回れば、各地で、ほぼ同じ特徴を持つ土器が出土していることにあらためて気づきます。つまり、これらの地域が、ほぼ同じ時代に、同じ文化を共有していたことが分かります。そして、海が人の流れを隔てるのではなく、むしろ強く結びつけていた事実を体感できます。土器を作るのはもっぱら女性の仕事で、さらには母から娘へ、母から娘へ、

と製作方法を伝授したという説が有力なようです。この説が本当なら、同じ土器を使っていた地域は、人々が互いに結婚し、行き来し合う間柄だったということになります。そんな知識を念頭にさまざまな土器を見れば、海峡を越えた親子のつながりや人の暮らしが、その向こうに浮かんでくる気がします。

縄文時代は、出土する土器の特徴などから、草創期、早期、前期、中期、後期、そして晩期に大別されています。どの時代の土器も、独特の持ち味や美しさがあり、見ていて飽きることはありません。それでも、いくつか、特に気に入っている土器があります。例えば、縄文時代早期の「物見台」（ものみだい）式の土器。優美な曲線とすっきりした直線的なフォルムの組み合わせがとても印象的です。物見台遺跡は、青森県の北東端、太平洋と津軽海峡に面した青森県東通村の尻屋崎にあります。また、三内丸山遺跡で知られる「円筒式土器」は、縄文の前期から中期にかけて、「道南・北東北のケン」の全体に広がっていた様式ですが、特に八戸市内の遺跡から出土した前期の「円筒下層式土器」は、とても繊細な縄目の文様に覆われていて、思わず息をのまされます。遙かに水平線を見渡しながら、土器の表面に施紋していた人々の手業は見事というしかありません。

芸術的な完成度でいえば、やはり縄文時代の最後を飾る、晩期の「亀ヶ岡式土器」は外せません。青森県つがる市の亀ヶ岡遺跡にちなんだこの名はよく知られていますが、考古学的な土器の形式名としては、岩手県大船渡市の大船渡湾奥に位置する大洞（おおほら）貝塚の出土品から、年代順に「大洞 B 式・BC 式・C₁ 式・C₂ 式・A 式・A' 式」が設定されています。B 式の器形と雲のような文様は、丸みを帯びた素朴な面持ちがあります。しかし、時代が進むにつれて、器形も文様も、どんどん洗練され、研ぎ澄まされたような雰囲気を帯びてきます。白眉というべきは、八戸市の是川中居（これかわなかい）遺跡の C₂ 式の出土品でしょうか。「この薄さと形は絶対に現代人はまねできない」と考古学者が舌を巻く、凄みすら感じさせる浅鉢などを、現地で目にすることができます。ほんの少しの知識があれば、あるいは考古学に詳しい友人がいるだけで、道南や北東北の暮らしは、とても深く、豊かな、味わい深いものになる。遺跡巡りをしている実感です。

2017 年の夏、念願だった函館市縄文文化交流センターを訪れ、展示品の国宝・中空土偶をやっと現地で見ることができました。ここもまた、かつては青森と同じ「ケン」に属していたので、展示されていた資料の多くは、なじみがあるものでした。しかし、近くの史跡・大船（おおふね）遺跡の遺構には驚かされました。縄文中期の竪穴式住居は、床の深さが 2m ほどもあり、まるで落とし穴のような景観でした。同じ時期の本州側の竪穴式住居は、深さがせいぜい 50cm ほどです。同じ「ケン」の中でも、やはり現地に出向くことで初めて、心に落ちてくるものごとがあるのだな、と痛感しました。ほとんどの遺跡や縄文関係の資料館は、残念ながら、公共交通機関の利用が便利とは言えません。マイカーかレンタカーの利用が有力な選択肢となります。この 20 年ほどの間に、散発的に見学してきた道南・北東北の遺跡群を、まとまった休みを取ってマイカーでゆっくり、フェリーを使って回り直したいーそれが最近の願望の一つです。

2018 年 9 月 青森大学教授 櫛引 素夫